

ヘルフェリツヒの貨幣價值論

大 野 純 一

貨幣價值理論は一般經濟價值論の特殊部門を構成する。然るに一般經濟價值論たるや、古往今來甲論乙駁せられ今に至るも尙其の歸趨を見出し得ざる問題の一である。従つて貨幣價值理論は必然に紛糾錯雜し、其の稱道する所千差萬別にして吾等後進の向ふところを躊躇せしめるのである。

然し乍ら、今此の混沌模糊の中より退いて思索を回らす時、其處に三ヶの範疇を見出し得る。其二は、最も古き貨幣價值説にして、地金學説或は素材價值説 *Metallismus od. Stoffwerththeorie* とも稱し得可く、貨幣は交換手段、價值の尺度たるが爲には必然に素材價值あるを要す。貨幣の價值とは、とりもなほさず、此を構成する金屬の價值なりと主張する。今日に於ても尙 Lotz, Diehl はこれに屬する。二は、斷片的立言をも涉獵するならば、其起源を Davanzati, Law, Petty, Berkeley, Hume の古きに求め得るも、其理論的基礎付けにあつては、最近 Knapp, Bendixen, Elster によつて初め

て完成されたる名目學說或は指圖學說 Nominalismus od. Anweisungstheorie である。此の種の學說によれば、貨幣の本質は表券 Zeichen 指圖證 Anweisung 或は計算手段 Rechenmittel たることにあり、従つて貨幣自身は價值を有せぬ。從來貨幣の價值なりと觀られたるは、實は貨幣によつて購買さるゝ財の價值の反映なるか、若しくは貨幣を構成する材料の價值にして、其の何れたるを問はず貨幣其れ自身の價值なりとは稱し得ずとする。

抑々貨幣は、當初實體價值より出てたるは勿論なるも、一度實體價值にして貨幣の形式をとる時は、其の活動の爲に新なる價值を喚起し、これによつて金屬貨幣には附加的價值を與へ、表券貨幣には唯一の價值を與ふるのである。これ史的事實の證明するところである。かゝる發展の經路に於て、地金學說は貨幣自らの生立ちし故郷を懷ふの情餘りにも切なるに比し、名目學說は幾多貨幣理論を災せる故郷に冷淡なるの餘り貨幣現在の立脚地をも忘却せんとするの憾あるを免れぬ。然るに第三範疇たる貨幣價值說は、過去に囚はれず現實を沒却せず健實なる行路を辿りつゝあるかの如くに思はれる。こゝに所謂第三貨幣價值說とは職能價值說 Funktionswertheorie にして、貨幣に素材價值の必然性を否定すれども、貨幣を以つて無價值なる表券なりとは解せず、貨幣は他の一般財と同様價值性を持つ、而して其の價值の由來するところは、今日の經濟組織の中に於ける貨幣の職能

に在りとする。吾が Helferich や Simmel, Soda, Heyn と共に此第三範疇に屬するのである。

Das Geld Sechste Auflage. 1923 に包含せらるゝ貨幣價值理論は、彼自らの名くるところに従つて、質的問題と量的問題とに分れる。質的問題の取扱ふところは、貨幣は價值を有するや否や、貨幣にして價值を有すとせばそは如何なる價值なりや、その成立の條件如何等貨幣價值の本質に關するものであり、量的問題の取扱ふところは、貨幣價值の大きさは如何にして決定せらるゝや、其の變動は如何にして生ずるや等貨幣價值の變動に關するものである。量的問題はこれを他日に譲り、本稿の目的とするところは、彼の所謂質的問題を叙述し以つて余自らの研究の一端となすにある。便宜上叙述の順序を示すならば、先づ本題の理解を容易ならしむるの一助として、彼が貨幣の經濟的本質並びに一般經濟價值觀を紹介し、次で貨幣に於ける價值性の有無、貨幣價值成立の條件を叙述し、最後に卑見を述べて見たい。

(1) K. Kirmaier, Die Quantitätstheorie, 1922, S. 13.

H. Döring, Die Geldtheorien seit Knapp, 1922, S. 8, 36.

一、貨幣並びに價值の概念

貨幣價值を論ずるに當つては先づ貨幣並びに價值の概念を明かにしなければならぬ。故に余はヘルフェリツヒの貨幣價值説を叙述するに先ち、彼の貨幣本質觀と一般經濟價值觀とを簡単に紹介する。

ヘルフェリツヒに従へば、貨幣の本質は、其實體乃至現象形式にこれを求むることを得ずして、其の職能に於てのみ發見するを要する。従つて貨幣の本質を發見するには二つの方法が可能である。一は、國民經濟なる有機體を出發點とし其中に於ける貨幣の地位を發見する方法であり、二は、貨幣が有する個々の職能より出發し相互を比較し其の本質性を詮索し以つて本質的職能と附隨的職能とを區別し附隨的職能を捨て、本質的職能を確立する方法である。而して兩者何れの方法によるも同一結論を得、貨幣の本質は發見し得可しとする。(S. 259—260)

彼は先づ第一の方法に従つて、今日の國民經濟の特質は分業と私有財産に基く交易現象即ち人格間に於ける價值移轉に在り、而して貨幣は其中にあつて價值移轉の媒介者たるの地位を有す、と結論する。(S. 261—264)

次に彼は第二の方法に従つて曰く、通常貨幣の職能として列舉せらるゝものは、交換手段・支拂手段・資本移轉の媒介手段・一般的價值表示並びに時間的場所的價值の負擔者等である。然るに、

價值移轉の手段に對し、交換手段・支拂手段・資本移轉の媒介手段は部分的職能 *Teilfunktion* たり、一般的價值表示は二次的職能 *Konsekutivfunktion* たり、時間的場所的價值の負擔者は副職能 *Nebenfunktion* たるが故に、交易の媒介たる職能は根本的であり、從つて貨幣の本質もこれに在る、と。

(S. 283—285)

故に彼は何れの方法によるも貨幣の本質は交易の媒介者たることに在りとする。從つて彼によつて定義されたる貨幣は、或與へられたる經濟制度の下に、且與へられたる經濟領域に於て、經濟人間の交易即ち價值の移轉を媒介するを本來の性質とする容體の總體なりとする。(S. 263)

以上は彼の貨幣本質觀の大要である。然らばその一般經濟價值觀は如何。

ヘルフェリツヒによれば、價值は事物其自身に附着する性質ではなく、寧ろ人間主體と、外界との關係に其の基礎を有する。價值は、客體の主體もしくは團體に對する意義に就いての、主體の判斷を表明したものである。ジムメルの言ふが如く、主體の側に事物の評価が生じ、價值が発生するてふ事實は、事物の實在に相似する根本現象である。故に價值の如何なる定義も演繹も、單に價值發生の條件を明かならしむるに過ぎずして、此の條件によつて價值は創造せられるのではない。一客體に對する價值の證明は、既に或客體に前提せられて居る價值を他の客體に對して認めねばなら

ぬと言ふことの強要を意味する。然らば、經濟價值の條件如何。經濟價值は、外界の事物が一方に於て慾望の對象にして、他方に於て其の獲得に障礙が存し、此を除去するが爲には勞働と犠牲とを必要とする場合に出現する。かゝる前提の下にのみ、經濟主體は事物に經濟的意義即ち經濟價值を認める、と言ふのである。(S. 298)

更に彼は、此の主觀的價值は、評價の社會性殊に交換の事實によつて、著しく客觀性を取得し、茲に客觀的交換關係即ち價格の世界は構成される、と解し、交換價值によつて價格を説明せんとする學說に對しては、交換價值は交換關係を前提するが故に、それは價格よりの抽象である、従つてこれを以つて價格を説くことを得ず、と駁し。(S. 298—302) 限界効用說に對しては、個人に對する財の利用性の度合はこれを量的に規定し得ざる限り、これを以つて直接價格を説くことを得ず、として斥けるのである。(S. 577) 而して正しき價格の決定原因は、單に直接の當事者のみならず、需要供給なる社會的大量要素に求むるを要す、但し價格と需要供給との關係は一方的ならずして相互的なり、と主張するのである。(S. 579)

二、貨幣に於ける價值性

以上によつて余は、ヘルフェリツヒの貨幣並びに價值の概念を略々明かにし得た積りである。次に貨幣價值成立の要件を説くに先ち、貨幣に於ける價值性の有無に關し彼の考ふところを紹介しなければならぬ。

多くの經濟學者は、貨幣は價值の尺度なることを前提し、この職能を營むが爲には、貨幣に固有の價值あるを要するや否やの見地より、貨幣の價值性を論ずるが故に、ヘルフェリツヒは先づ價值尺度論の批評に着手する。彼は、Kries の左の言葉を引用する。

『凡そものを測定即ち量的に規定し得る客體の量的關係を確立するに當り、此が測定の要具となり手段となり得る對象は、其自身測定せらる可きものを一定の量に於て有せざる可からざるは、自然法則的必然性を持つ、即ち測定さる可きものゝ未知量を發見するが爲には、これと同種の測定具内の既知量を利用しなければならぬ。』長さを測るには、其自身長さを有する測定具によつてのみ可能である。然るに、屢々大さの關係を述ぶるに當り、言語上の形式がかゝる主張と矛盾するが如きことあるも、聊か熟慮をめぐらすに於ては、もとよりかゝる矛盾は一掃せらるゝのである。例ば距離を説明するに時間を以つてし、反對に時間を測るに時計の通過せる距離を以つてするが如きはこれに屬する。然し乍ら、前者にあつては、距離は一時間に於ける歩數の距離によつて、後者にあ

つては、時間は時計が字板の一時刻より他の時刻へ運動するに要する時間數によつて、測定せらるるのである。『故に具體財に存する經濟價值の一定量を測り得るものは、自ら經濟價值を有し、自ら經濟財たるものを措いて他にこれなきは疑ふ可からざる眞理である。』⁽¹⁾と。

言ふまでもなく、この種の所論は、貨幣は價值の尺度なりてふ前提に立ちて、貨幣に固有の價值を是認せんとする、然るにジムメルは同様の前提より發し然かもクニースの結論を否定する、とヘルフェリツヒは言ふ。即ち彼の解するところによれば、ジムメルの所論は次の如くである。

比較さる可き二ケの客體は同質たるを要すと言ふことは、二つの量が直接の比較によつて測定さるゝ場合にのみ妥當する。然し乍ら、測定には直接の測定以外に尙他の方法が存在する。二量の關係・差異・變化等を測定する場合に於ては、測定實體の比例にして測定さる可き實體に反映せば、其目的を達し得可く、兩者は必しも同質たるを要せぬ。木の枝を折る風の力と同様のことをなす人の手とは、同質なる限りに於てのみ、相互に比較し得るも、尙風の力をそれが折つた枝の太さを以つても亦測定することが出来る。勿論折られた枝其自身は、手の力と同様の意味に於て、風の強度を表示し得ざるも、二つの風力の強度の關係並びに個々の風の力の相對的強度は、一方は木の枝を折つたに反し、他方はこれを折ることを得ずとの事實によつて測定し得るのである。『吾々の知り得

る限りに於て最も相違する對象にして、形而上學も自然科學も、共に兩者を一方に歸せしめ得ざる世界型像の中軸 Die Pole des Weltbildes たるものは、物體の運動と意識の現象である。一方の純粹なる内容と、他方の純粹なる外延とは從來其間に統一的關係を求め得ないのである。然るに精神物理學者は、刺戟として感官に接觸する外的運動の變化により、感覺の變化の相對的強度を測定することを得る。』これ等の場合に於ては、一要素の量と他の要素の量との間に常恒的なる關係が存するが故に、兩者の間に何等質的關係即ち質的相等性なきにも拘らず、一方の大きさによつて他方の相對的大さを測定することが出来る。故に價值を測定す可き貨幣の能力は、貨幣が固有の價值を有すると言ふ事實に依存すとの論理上の原理は破られる⁽²⁾、と。

斯くクニースもジムメルも、共に價值尺度論に基いて貨幣の價值性を論じ、一方はこれを肯定し、他方はこれを否定する。ヘルフェリツヒは此點に內在的批評を下して次の如く言ふ。

ジムメルの言ふが如く、測定には異なる二の方法が存在することは認めなければならぬ。一方は測定する客體と測定せらるゝ客體とが直接に比較せらるゝ場合にして、この際には、兩客體の質的相等性は無條件に要求せられる、他方は此に比し少々複雑にして兩者は直接に比較し得られざる場合である。風・感覺の強度・溫度・時間等凡て抽象的大さの測定は此場合に屬する。即ち直接の比較

は物的延長にのみ適用し得るのである。従つて測定多くの場合には、比較さる可くして直接測定し得ざる二つの大さと、直接比較し得る空間的大さ乃至は過程との間に、一定の常恒的關係を確立し、以つて一ヶの中間項を利用することによつて、其目的を達するのである。斯くして初めて時間を空間的運動過程により、溫度を水銀柱により、重量關係を秤盤の運動により乃至は風力を枝の太さによつて測定し得るのである。然し乍ら、直接の測定によると、間接の測定によるとを問はず、凡て測定の最後の結果は、或種の未知量を同種の既知量を以つて表示す、との點は、クニースの説も亦正しい。クニースの例に於て、時計による測定の場合、時量は時計が字板の一定距離を通過するに要する時間單位によつて表示さるゝと同様、ジムの例に於て、枝の太さによる測定の場合も亦、風の強度は結局に於て或太さの枝を折るに要するエネルギーの一定量によつて表示さるゝのである、と。(S. 546—549)

かくヘルフェリツヒは、測定の最後の結果は、常に同種の大さの間に於ける量的關係の發見なりとの結論に達するも、彼は、これを以つて直ちにジムの結果を否定することは出来ぬ、何となれば、測定の具或は測定手段と被定物とが同質たるを要するは、直接の比較による測定の場合のみにして、間接の測定にあつてはかゝる前提を必要とせざるを以てなり、と論ずるのである。然らば、

貨幣による價值の測定は直接の比較なりや、間接の比較なりやが次に解決す可き問題である。

ヘルフェリツヒの解釋に従へば、ジムメルは詳細なる定義を施すことなく、與へられたるものとして、財貨の量と貨幣の量との間に一般的なる關係あるを認める。其關係は貨幣量の増加と物價の騰貴或は財貨の増加と物價の下落との間に存するが如き、曖昧にして例外に富む關係である。『從つて其詳細はこれを留保し、財貨の總量・貨幣の總量及兩者間の倚存關係のみを考へる。各個の商品は、處分し得可き財貨總量の特定部分なるが故に、財貨總量を a と名けるならば、各個の商品量は I_m^a である。又此商品によつて支配される價格は、貨幣總量中の其に應ずる部分なるが故に、貨幣總量を b と名けるならば、各個の商品の價格は I_m^b である。故に a と b との大さを知り、特定の對象が販賣し得可し價值の幾何の部分を構造するやを知る時は、其貨幣價格を知ることを得、また後者より前者をも知ることを得る。故に貨幣と價值ある客體とが質的相等性を有するや否やには拘りなく、換言すれば、貨幣は其自身價值なりや否やには拘りなく、特定の貨幣量は、對象の價值を規定又は測定し得るのである。』との議論から、ジムメルは、貨幣の價值測定は間接の測定であり、從つて貨幣は其自身固有の價值あるを要せずと結論する。

然し乍ら、ヘルフェリツヒは此種の論構には見逃し得ざる缺陷あり、而してそれはジムメル自ら感

ぜしところなりと評するのである。即ちヘルフェリツヒは曰ふ、抑々相對量の測定は、絶對量間に何等かの關係あつて初めて可能なるが、若し貨幣總量と財貨總量との間に、彼が前提したるが如き、何等かの一般的關係ありとすれば、それは價值關係以外に考ふるを得ぬ。然し乍ら斯く解して、貨幣總量と財貨總量との相等關係に基いて、一定貨幣額の價值測定能力を基礎付けんとするは、循環論を構成する。何となれば、既に一方を以つて他方を測定し得る可能性を前提するが故である。故にジムメルは、貨幣總量と財貨總量との間に、價值相等以外如何なる關係存するやを明かにせざる限り、循環論を構成し、貨幣は必然價值性を有すとの結論に達しなければならぬ、と。(S. 349—351)

以上は價值尺度論に對するヘルフェリツヒの内在的批評にして、價值尺度論の當然負ふ可き歸結である。次に内在的批評を去つて、價值尺度論の前提に關する彼の駁論に移る。

ヘルフェリツヒの考へによれば、測定は客觀的のものにのみ可能にして、吾人は、吾人の感覺意志乃至は判斷より獨立なる客體の性質は、これを同質の一定量を以つて客觀的に發見し、測定することを得るも、價值は個人の心裡に於ける評價過程によつて生ぜる主觀的現象なるが故に、孤立せる主體が一財と他の財とを等しく評價したりとするも、この評價は兩財間に存する客觀的關係の測定の結果なりと言ふことを得ぬ。二客體間の相等價は主觀的評價過程の表出にして、それは評價主體

によつて發見せられたるにあらずして、創造せられたのである。價值の測定ならずして、價值付けである。(S. 298—299) 抑々交換は二財間の關係に就いて、主體の價值判斷が相違するによつて生ずるが故に、交換以前には、此互に異なる主觀的價值判斷以外に測定さる可き客觀的價值は存在せぬ、(S. 303)と論じて、彼は、交換當事者は同量の價值を有し交換に先つて兩財の價值は測定さるとの思想に、反對するのである。

此際或は、兩個人が各々主觀的價值判斷の範圍内に於て一定の交換關係に同意し、交換を實行したる後に於ては、一ケの客觀的事實成立し、これによつて兩財の相等價は認められ、一財の交換價值を以つて他の財の交換價值は測定せらるゝにあらずや、と反駁する者あるやも知れぬ。此に對して、ヘルフェリツヒは次の如く答へる。

二財間の交換關係は、事實交換の行はれた瞬間、其交換にのみ妥當するのであつて、二財間の交換は常に同一條件の下に生ずるものではない。故に二財間の交換關係は物體の重さや延長の如くに、客觀的たるを得ぬ。従つて貨幣と財との交換によつて生じた價格は、尺度を以つて延長を計るが如くに、精確に客觀的ではなう。(S. 307) 然のみならず、貨幣の價值其自身が、他の測定單位の如く、一定不動ではない。吾人は客觀的交換關係より個々の財の交換價值を抽象し其尺度を對價に

於て見出す。故に交換價值の場所的時間的變動は、交換關係の場所的時間的變動によつてのみ、客觀的にこれを知り得るのである。従つて吾人が直接に知るは、二財間の交換關係の變化のみにして、一財の價值の變動はこれを知ることが出來ぬ。されば交換關係變動の原因が兩客體の何れに存するやは、直接判斷するを得ない。唯吾人は、需給の大きさ、或は二客體の各々が他の客體に對する交換關係を觀察することによつて、間接に判斷するに過ぎぬ。然るに、貨幣は常に變動して止むなき需給の對象たる限り、貨幣其自身の價值も變動するものと解しなければならぬ。故に貨幣によつて表示されたる價值は、假令場所的時間的に異なるも、相互にこれを比較することは出來ぬ、と。(S. 307—309)

貨幣にして價值を測定し得ずとすれば、所謂價值尺度なる職能には如何なる内容を與ふ可きであらうか。

ヘルフェリツヒは、貨幣は一般的交換手段なるが故に、凡ての交易客體は先づ原則として貨幣と交換せられる。其結果あらゆる交易客體の價格は専ら貨幣を以つて表示される。このことは價格の比較を非常に容易ならしめる。然し乍ら、此を以つて價格は貨幣によつて測定せらるゝものなりと思惟することは出來ぬ。價格は貨幣によつて測定せられる (gemessen werden) のではなく、價格は

貨幣を以つて協定せられる (bemessen werden) のである。然るに他面價格は交換價值の表示なりとせらるゝが故に、貨幣は交換價值の一般的表示又は公分母たるのである、と解し、所謂價值の尺度の職能にして斯如んば、價值の尺度なる語を避けて、統一的價值表示なる語を採るを要すと主張するのである。(S. 304)

斯くしてヘルフェリツヒは、貨幣は價值を測定せず、クニース、ジムメルは共に前提に於て誤る。従つて此見地より貨幣の價值性を論ず可からずとして、價值尺度論の基礎を離れて、貨幣の價值性を次の如く證明せんとする。

凡そ交換價值は交換の事實よりの抽象にして、すべての交易客體は先づ貨幣と交換せらるゝ以上、他の交易客體と同様、貨幣にも亦一の交換價值を認めなければならぬ。また假令抽象の產物たる交換價值の概念を離れ、價值の根本現象に立歸つて考へても、尙貨幣の價值性を否定することは出來ぬ。既に述べたるが如く、價值の如何なる定義も演繹も、單に價值發生の條件を明かにするに過ぎずして、此條件によつて價值は創造されるのではない。一客體に對する價值の證明は、既に或客體に前提されて居る價值を他の客體に對して認めねばならぬと言ふことの強要を意味する。もし財に對し價值を前提するならば、財と貨幣との間に絶えず交換が行はるゝ以上、貨幣にも亦此價值を認

めんとする強要が存する。價值は現象形式の如何を問はず、凡て客體の主體若しくは團體に對する意義に就いての主體の判斷に基き、主體が一財に對し一定の比率を以つて貨幣を與へ又は受取らんとするならば、そは貨幣は、財と同じく、一般的交換手段としての職能を盡さんが爲には價值判斷の對象たり、即ち價值性を有せざる可からざることを意味する、と。(S. 551—552)

然るに、所謂指圖證説は、交換に際しては、貨幣によつて物其自身が與へられるのではなく、他の物に對する單なる指圖・代表若しくは象徴が與へられる、從つて貨幣と商品との交換に於ては、實は一商品と他の商品即ち與へられたる貨幣によつて將來獲得し得る商品との交換が行はれる、されば貨幣は無本質的中間項なり、との議論より、貨幣の價值性を否定せんとする。これに對しヘルフェリツヒは、そは貨幣が現經濟組織の下に占むる地位を誤つて判斷せるの結果なりとして曰く、貨幣を以つて財其自身たらずして財に對して記號若しくは指圖なりと解する時は、貨幣によつて一定分量の一定財を一定人より獲得し得るを要する。何となれば、被指圖・被代表若しくは被象徴物を確定することなくして、如何なる指圖も代表も乃至は象徴化をも考へ得ぬからである。然るに現經濟秩序の下に於ては、貨幣の所有者は何人に對しても他の事物を強要す可き權能はなく、只自由なる評價の對象を有するに過ぎぬ。貨幣が一般に販賣さる可き貨物を獲得し得るは、商品に對し單

に程度の差異に過ぎぬ、それは種類の差異たり得ない。貨幣が何人にも受領せらるゝは、他の事物を其によつて調達し得るが故である。これと同様商品は、個人經濟に於ける必要品を調達するが爲に製造せられるのである。若し指圖の概念より、一定の事物に對する一定の請求權を一定人に附與すると言ふ内容を除き、不定量の不定事物を不定人より調達すると言ふ内容のみを残すならば、貨幣のみならずあらゆる商品は指圖たりと解しなければならぬ。然し乍ら、指圖なる概念をかく定義するに於ては、二つの歸結が存する。即ち凡ての商品より獨立の價值性を奪ふか、若しくは廣義の指圖にも亦獨立なる價值性の可能を許容しなければならぬと言ふことである。然し乍ら、牽強附會を避け、概念の限界を守らんとせば、指圖なる概念は一定の内容に關してのみ適用しなければならぬ。故に指圖は被指圖物と不定の關係に於て交換せらるゝが如きことはない。交換に際し絶へず變動する評價の對象は、不可欠の前提として獨立の價值性を持つ。従つて貨幣は、價值對象に對する指圖たらずして、其自身一ヶの價值對象である、と。(S. 552—554)

- (1) K, Knies, Das Geld, 1885, S. 147.
- (2) G. Simmel, Philosophie des Geldes. Vierte Auflage. 1922, S. 102.
- (3) G. Simmel, a. a. O., S. 104.

三、貨幣價值成立の條件

貨幣は本質上價值を有すとせば、其價值は如何なる價值であらうか、其成立の條件如何。

ヘルフェリツヒの考ふるところによれば、貨幣に於ける價值性の問題と貨幣素材の價值性の問題とは截然區別しなければならぬ。従つて彼は、貨幣は價值性を有すると言ふことは、決して貨幣は價值ある素材より構成される即ち實體價值を有すると言ふことを意味しない。又貨幣は素材價值なくして存立し得ると言ふことより必然に貨幣は無價值なりとの歸結を導くこと能はず、とする。ヘルフェリツヒに従へば、紙幣本位の下に於ては、貨幣素材は無價值であり、かつ紙幣によつて價值ある素材を要求するの權利は與へられて居ないにも拘らず、紙幣は他の交易客體との交換に際して受領せらるゝが故に、他の價值對象より獨立せる動的價值を有する。故に紙幣は其價值を専ら貨幣としての職能に基いてのみ有する。又制限鑄造の銀本位の下に於ては、貨幣單位の價值が其基礎たる銀の分量の價值よりも高きは、鑄貨は地銀の爲し能はざる貨幣職能を營むが故である。されば、貨幣たる鑄貨又は證券は國民經濟上欠く可からざる職能を營むが故に價值を有するのである。貨幣の價值は一定條件の下に於ては、素材の價值より獨立して其自身に存立し得るのである。従つて貨幣の

價值は素材の價值以外に此を求むるを要す、とする。(S. 554—555)

故に通常は實體價值に對して、貨幣は職能價值を有すと稱せられるのである。然し乍ら、彼の考によれば、根本的に異ると觀らるゝ此二種の價值即ち實體價值と職能價值は、其關係を理論的に考察するとき、何れも凡ての經濟價值が據つて以つて生ずる一般的前提に其根基を持つのである。凡て價值は事物其自身に附着した性質ではなくして、寧ろ人間主體が外界に對する關係に基く。即ち事物の價值は、所謂實體價值と言ひ職能價值と言ひ、單なる *Sein* の故に存し、*Substanz* の中に包含せられるものではない、そは一定の經濟的職能を營むことによつて直接間接人間の慾望を充すが故に價值を有するのである。従つて如何なる經濟價值も職能價值にして、其處には實體價值なるものは存せぬ。されば實體價值と職能價值との外面的 *Antinomie* は消滅する。實體價值を有する貨幣と職能價值のみ有する貨幣との間には次の如き程度の差のみが存する。即ち職能價值のみ有する貨幣は其性質上貨幣としての職能のみを盡し得るに過ぎざるも、所謂實體價值を有する貨幣は貨幣以外にも其素材を使用し得ると言ふことである。而して實體價值を有する貨幣も、職能價值のみある貨幣も、共に經濟價值一般の條件に基いて價值を有する、と解するのである。(S. 555—557)

既に述べたるが如く、ヘルフェリツヒは、一般經濟價值の基礎前提は、外界の事物が一方に於て

人間慾望の對象にして、他方に於て其獲得は障礙に對立し、此を除去するに勞働と犠牲を要するところに在りとする。然らば貨幣は如何にして此條件を具備するや。

彼は、慾望の對象たることは、決して直接に慾望充足に役立つものゝみに限らず、尙其他に消費財を製造調達するが爲に使用らせるゝ手段財がある。而して人格間に於ける價值の移轉を媒介するてふ重要な任務を有する貨幣は此部類に屬する。即ち貨幣は生産過程にあつては生産手段と勞働力とを結合し、更に既成の商品は此を生産者より消費者へ移轉せしむることによつて、他の手段財と同様慾望充足に役立つ。只其特異なるは次の點に在る。即ち他の財は何れの經濟制度の下に於ても慾望の對象たり得るに反し、貨幣は現代の經濟制度の下にのみ慾望の對象たるのである。然し乍ら、現制度の存する限り貨幣は人間慾望の對象たり、との議論に基き、貨幣に經濟價值の一前提を與ふるのである。

彼はまた貨幣に於ける經濟價值の第二の前提を次の如くに論證するのである。

調達の困難と言ふことは、貨幣素材が多大の費用を投じてのみ生産せらるゝ場合、又は貨幣素材が一方に於て稀少性を有し、他方に於て貨幣以外の目的にも多大の需要存する場合には、明かに充たされて居る。而してこれは貴金屬貨幣の場合に該當する。然し乍ら、殆んど費用を要せぬ素材よ

りなる紙幣は、如何にして第二の前提を充たすであらうか。茲に注意を要するは、調達の困難は必しも自然の抵抗・缺乏に限らぬと言ふことである。調達の困難は其原因を社會並びに國民經濟の法的制度にも有するのである。個人又は團體が、他人の慾望の對象たる客體の製造所有に關する獨占を有し、他人は、該事物獲得に際し反對給付を要求せらるゝ場合はこれに屬する。調達の自然的困難に代つて、或は其に加へて、社會的困難は其客體に價值を與へ、若しくは其價值を増加する。貨幣の場合に於ては、この事は明白である。現在の法的秩序の下では、國家は貨幣の造出に關して排他的權能を有する。個人は何物かを與へ或は勞働に従事して初めて國家より貨幣を受領することが出来る。故に貨幣獲得の自然的困難は殆んど存せざるも、尙國家は、造幣獨占權を利用して人爲的調達の困難を設け、其によつて經濟價值の第二の前提を供するのである、と。(S. 557—558)

斯くしてヘルフェリツヒは、經濟價值一般は成立の條件として利用性と費用性とを有するとの見地より、等しく經濟價值たる貨幣の價值も亦利用性と費用性を前提すと説く。

彼は、此結論に對し次の如き駁論を豫想する。即ち、如何なる目的に對しても有用ならざる對象が一般に貨幣たるの職能を營み得ると言ふは *petitio principii* である。抑々一般經濟財と貨幣との間には次の如き區別が存在する。前者にあつては慾望充足の手段たり得る能力は價值條件の一であ

るが、反對に調達の困難の爲に價值ありと言ふことは決して其の利用性の前提ではない。水は調達の困難の爲に價值ありや否やには拘りなく渴を醫するに役立つ。然るに後者、貨幣の場合は此と異なる。貨幣にあつては、既に價值を有すと言ふことが價值移轉の手段たる職能を營むが爲の不可欠の前提である。價值なき貨幣、從つて誰しも此に對し何ものをも與へぬ貨幣は、交換手段たることも、價值尺度たることも、尙又資本移轉の手段たることも出來ぬ。更にかゝる貨幣を以つて支拂業務を決済し、時間的場所的價值の負擔者たらしむることをも出來ぬ。かく貨幣は價值性を有する場合にのみ、何等かの職能を營み得るものとすれば、其の價值性を貨幣としての職能のみより誘出することを得ぬ、と言ふのが其れである。

此駁論に對し、ヘルフェリツヒの答ふところは次の如くである。

事實に於て當初交換手段・支拂手段或は價值の尺度たりしは、使用財としての價值ある素材であつた。然るに、此の種の財を貨幣として用ふるの結果、經濟制度に變更を來し貨幣は欠く可からざるものとなるに至つて、貨幣たる事物は其の價值を貨幣たる職能に基いて有するに至る。然し乍ら、貨幣を全然貨幣職能の基礎に据へるが爲には、貨幣本質に關する國家的秩序と支拂義務の存在が必要であつた。勿論何人も價值ある事物との交換に於て價值なき事物を受領するものではない。

換言すれば、立法は自由交易の忌避する事物を強制的に國民經濟上の交換手段たらしむることを得ぬ。他の理由より既に價值を有せざる事物は、自由意志に基くと強制に基くとを問はず、此を交換手段として充用することにより、價值を發生せしめ得るものではない。然るに支拂手段たる職能はこれと關係を異にする。事實將來の爲に價值なき事物の給付を約定する者はないが、一度國民經濟の成員間に廣く貨幣による支拂義務が存立し、國家的立法によつて債權者は如何なる事物を以つて支拂を受く可きやを規定し得る時は、國家は他に有用性なき事物に法的支拂力を附與し、以つて利用性を授くることが出来る。而して此の利用性は、造幣の國家的獨占と共に、獨立の價值基礎たるのである。支拂をなすものは、法制上の支拂物が他の目的に對し有用なりや否やを問ふの必要はない。故に既存の支拂義務履行手段たる職能は、他の凡ての有用性より獨立せる利用性にして、調達の困難と共に、該事物に價值を附與するのである。法的支拂力並びに調達の困難のみより生じたる此の價值は、更に該事物をして交換手段其他の貨幣職能に充用せしむるに至る。言ふ迄もなく歴史的には、貨幣による支拂義務發生以前、從つて純粹なる貨幣基礎の成立以前に貨幣は發生したのである。故に貨幣の起源は使用財を充用することによつて初まつたのである。されど貨幣發展の後期に於ては、實際的理論的に、貨幣は貨幣としての利用性のみより其の價值を有し得るに至る、と。

(S. 558—560)

又學者の中には、貨幣の價值の成立を解くに限界効用説を以つてせんとするもの少しとせぬ。ヘルフェリツヒが限界効用説そのものを否定するは既に述べたところなるも、彼は、假令一般には此の學説が可能なりとするも、尙貨幣には此を適用し得ざる特殊の理由ありとする。

ヘルフェリツヒは、抑々限界効用説は財の交換價值を決定するに、該財の個人經濟に對する利用性の度合を以てせんとする。然るに貨幣にあつては個人經濟に對する利用性の度合は、其の交換價值によつて決定せられる。個人經濟に於ける貨幣の評價を決定するものは、其によつて獲得し得る財、或は支拂に要する貨幣を調達するが爲に提供する財である。故に個人經濟内に於ける貨幣の限界効用は此等の財によつて享受し得る最少の利用である。然るに此の限界効用は既に一定の交換價值を前提するが故に、後者は前者に起因すとなすことを得ず、と論じて、彼は、個人經濟に於ける貨幣に限界効用説を適用し得ず、とする。更に彼は、國民經濟全體を考察するによつても尙限界効用説は貨幣に適用し得可からざるを知ると主張して言ふ。限界効用なる概念は一定の財貨によつて只一定の慾望のみが充足せられ、それによつて喚起さるゝ効用は常に一定段階に止まると言ふことを基礎とする。即ち慾望と財貨の數量が與へらるゝ時は享受し得る最少の効用は確立せられ、此

によつて他の財に對する該財の價值が決定せられる。然し乍ら、財貨の數量が與へられるのみで價值を決定し得る可能的効用が確立すると言ふ前提は、他の財には此を適用し得可しとするも、貨幣には適用し得ない。今茲に一千噸の穀物ありとする時は、これによつて一定數の人に一定度の満足を與へ得る。然かも穀物の交換價值如何に拘りなくこれをなし得る。然るに貨幣一定量の効用は、個人經濟にあつても、國民經濟に於ても、貨幣の交換價值如何によつて直接影響せられる。即ち他の財貨に對する貨幣單位の價值高きに従ひ、同一額の貨幣單位によつて交易せらるゝ財貨の數量は増々大となる。Hume は、貨幣數量の多少は國民經濟に於ける貨幣の効用には關係なく、貨幣の數量半減するも他の財貨に對する貨幣の價值二倍する時は、貨幣は以前と同一の任務を盡し得可し、と唱へたのであるが、其の中心に於て眞理を示す命題たるは疑なきところである。他の財に於ては、其の價值は一定量によつて享受し得る効用の制限に起因し、數量減少して充足し得ざる効用の度合上るに従ひ其の價值は増加するを常とするも、一定量より享受し得る効用は其の交換價值如何によつて増減するが如きことはない。然るに貨幣にあつては、一定量の効用は貨幣單位の交換價值の昇降により自由に此を伸縮し得るのである。故に個人經濟に於ても、國民經濟に於ても、貨幣の効用は其の數量によつて制限せられずして交換價值の變化によつて左右せられる。従つて貨幣の交換價

値は一定量によつて享受し得可き効用の制限に起因せず。故に限界効用説は貨幣の價值に適用することを得ぬ、と。(S. 576—579)

四、ヘルフェリツヒの所論に對する疑點

以上余は、ヘルフェリツヒの貨幣並びに經濟價值の概念より發して、貨幣の價值性、其の成立の條件等所謂質的貨幣價值説を紹介し終つた。

ヘルフェリツヒの所論は、既に一九〇三年に世に發表せられたるにも拘らず、貨幣の職能を強調し、地金學説を反駁し、以て誤まれる貨幣價值説を正したるは没す可からざる功績なりと言はねばならぬ。然し乍ら、余が熟讀玩味して尙消へざる疑問なしとせぬ。故に茲に此の疑問を開陳し、以つて諸先輩の教示を乞はんとするのである。

余が彼の所論を讀んで起したる疑問は左の二點である。

一、ヘルフェリツヒが貨幣に於ける價值性を證明するに當り、價值尺度論を駁し、その立場を捨てたるは余の痛快措く能はざるところであるが、『主體は一財に對し貨幣を一定の關係を以つて受授せんとするならば、そは貨幣は財と同じく、一般的交換手段たるの任務を盡さんが爲には價值判

斷の對象たり、即ち價值性を有すと言ふことを意味する』との彼の言は、余の疑ふところである。

先づ卑見を述ぶるに先ち、ヘルフェリツヒの此の主張に對するリーフマンの批評を聞かう。リーフマンは曰ふ、『確かに貨幣も亦價值判斷の對象であるが、吾人は如何なる意味に於て然るやを認識するを要す。主觀學說たると客觀學說たるとを問はず凡て從來の學說は、從つて又ヘルフェリツヒの如きも、其の域より遙かに隔つて居る。……ヘルフェリツヒは、實體價值を否定するとは言へ、恰かも一般に絶對價值が存在するが如くに、價值性、獨立なる價值性等を云々する。……然し「價值判斷の對象たること」と「價值性を有すること」とは同一たり得ぬことは、此を知るに難くはない。後者の言葉の使用は、ヘルフェリツヒを誤らしめ、彼の所論を誤謬たり、無價值たらしめたのである。而して其背後には、絶對價值の概念即ち貨幣表示價格は價值表示なりと言ふ誤謬が横つて居る』と。

かくの如くヘルフェリツヒは、貨幣は價值判斷の對象にして價值性を有すと主張するに對し、リーフマンは貨幣は價值判斷の對象なるも價值性を有せずと主張するのである。而して其理由とするところは、貨幣に價值性を認むるは絶對價值を有すとの誤謬に基くが故なりとする。余の考を以てすれば、貨幣が價值判斷の對象たるや否やは議論の餘地あるも、貨幣が價值判斷の對象たることを

認むる以上は、其の價值性を肯定しなければならぬと思はれる。何となれば、價值性を有せざる對象は價值判斷の對象たることを得ぬからである。故にヘルフェリツヒも、巧みなる皮肉を以つて、『或對象が有せざる性質に對する判斷は、リーフマンの批評其れ自身の如く、受くるに値ひせざる判斷なりと余には考へられる。』(S. 553)と言ふ。又ヘルフェリツヒが貨幣は必然に價值性を有すと言ふも、それは必ずしもリーフマンの解するが如く絶對價值を導入するものではない、と余には思はれる。何となれば、若しもリーフマンが『凡ての對象は主觀的にのみ、しかも人の異なるに従つて異つて評價せらるゝ』が故に、『吾人が客觀的に價值對象と稱することが出來、また其れ自らに於て價值性を有するところのものは全く存在せぬ』との意味に於て、絶對價值の概念を考へるならば、ヘルフェリツヒも亦かゝる價值を否定することは、『評價過程は個人の心裡に生ずる限り主觀的現象である』『貨幣の價值其れ自身は他の測定單位の如く一定不動たり得ぬ』等の立言によつて明かなるが故である。故にリーフマンの批評は的なきに放てる矢にも等しいのである。

卑見を以つてすれば、交換と賣買とは、價值低きものを與へて高きものを取る點に於ては何等の差異はない。然し乍ら、交換にあつては、當事者各々は自己に對する客體の主觀的價值を判斷し、その價值を比較するも、賣買にあつては、一方の客體即ち貨幣に就いては、各當事者は自己に對す

る主觀的價值を判斷するものではない、と言ふ點に於て兩者は其性質を異にする。換言すれば、交換に際しては二客體は評價により價值付けられ、其主觀的價值が相互に比較せられるのであるが、賣買に際しては貨幣は評價により價值付けられるのではなく、既に社會の價值付けせる價值を發見し、以つて他の價值と比較せられる、と余は解するのである（後段參照）。

右の解釋にして誤りなくんば、賣買に於ても、交換同様二價值の存在することを認めなければならぬ。然るに若し貨幣にして價值對象ならずとすれば、賣買に際し如何なる二價值が存在し比較せらるゝや。此際賣手の有する商品の價值と、買手の有する貨幣によつて獲得し得る商品の價值とが此要求を充たし、この二價值の比較によつて賣買は成立すと解せらるゝやも知れぬ。然し乍ら、賣買當事者は一々其貨幣によつて得可き商品を意識するは事實上不可能なる限り、かゝる解釋をなすことは出來ぬ。

賣買に於ても亦、交換一般に於けるが如く、商品の價值と貨幣其自身の價值とが比較せらるゝと考へなければならぬ。従つて貨幣は其自身價值性を有すと觀なければならぬ。故に余は、貨幣は價值性を有すとの結論に於てはヘルフェリツヒに賛成である。唯余は、貨幣は價值判斷の對象なるが故に價值を有すと言ふことは到底承服し能はざる所である。ヘルフェリツヒの此處に所謂『價值判斷

の對象』と稱するは、個人的主觀的評價の對象を意味するは『抽象の產物たる交換價值の概念を無視し、價值の根本現象に立歸つて考へても尙貨幣の價值性を否定することを得ぬ』、『凡て價值は…主體の判斷に基く』等の言によつて明白である。然し乍ら、貨幣を個人的主觀的評價の對象なりとする時は、貨幣と商品との交換は賣買ならずして直接交換と觀なければならぬ。従つて兩客體の何れをも貨幣とは稱することを得ざるに至るのである。故に余はヘルフェリツヒに對して、リーンマンとは正しく反對に、貨幣は價值を有すれども、それは主觀的價值判斷の對象たらずと主張したい。

二、次に余の疑問とするところは、貨幣の價值は、一般經濟價值と同様利用性と費用性とを條件として成立するとのヘルフェリツヒの見解である。假令一般經濟價值は利用性と費用性に基いて發生し得可しとするも、余は之を以つて直ちに貨幣の價值の成立條件となし得るや否やを疑ふのである。

一般財貨に於ては價值は効用に起因し、使用價值あつての交換價值にして、兩者は先後因果の關係にありとせられる。然るに貨幣の効用は一般的交換手段として役立つことにあり、其獨立の利用性と雖も尙所謂交換價值と離れて考ふことを得ない。故に貨幣にあつては、効用と價值、使用價值と交換價值は、先後因果の關係ではなく相關關係にありと觀なければならぬ。従つて貨幣に於て

は、一般財と同様効用あつての價值なりとし、前者より後者を導くことは出來ぬ。このことは、ヘルフェリッヒが限界効用説の批評に際し『貨幣にあつては、効用は數量に制限されず、寧ろ交換價值によつて制限さるゝが故に之を適用し得ず』との主張に照らして、當然彼の改めなければならぬ點である。

然らば、何が故に貨幣の價值は個人的主觀的價值判斷の對象ならずして存立し得るや、何が故に貨幣の効用と價值とは先後因果の關係ならずして相關關係の下にありや。

余は此問題を解くに當り、先づ個人と社會との關係を観る。抑々社會が存在するが爲には『各個人の間に Wechselwirkung の關係あることを要し、其 Wechselwirkung は一定の外的形式を具備するに至り、而して此外的形式を得たる各個人間の Wechselwirkung の關係は最早各個人に zurückführen することを得ぬもの』たるを要す。即ち社會に於て個人は其獨立性を失ひ、全體中の部分としての意義を有するに至るのである。此際個人は特定の範圍に於てのみ獨立性を失ふを要し、すべての範圍に於て獨立性を失ふことは考ふことを許さぬ。若し然る時は、社會と個人の二概念を云々し得ざるを以つてゐる。故に兩者は獨立の概念なるも、社會は個人を俟つて初めて成立し、個

人はまた社會の存在を考へて初めて眞の個人たり得るのである。換言すれば、兩者は Korrelat の關係の下に立つのである。されば心理發生的には、先づ個人存在して後社會が成立するのであるが、論理的には寧ろ、社會あつて後個人は成立すると言はねばならぬ。而して社會的現象は心理發生的には個人的現象から發生するのであるが、一旦發生する時は、個人的主觀的現象から離れた獨立性と客觀性とを取得するのである。かくして獨立性と客觀性とを取得した社會的現象は更に個人的主觀的現象を制約し、其内容を變更するのである。即ち個人と社會は互に因果派生の關係をなして進み行くのである⁽²⁾。

今此關係を経済價值に適用して考へる時は、一物に對する個人的主觀的價值は、該物に對する社會的客觀的價值を俟つて初めて成立し、又一物に對する社會的客觀的價值は之に對する個人的主觀的價值の存在を考へて初めて可能である。故に一物に對し個人的主觀的價值を認めるが爲には、論理上其以前に該物に對し社會的客觀的價值を豫想しなければならぬ。此社會的客觀的價值は、心理發生的には個人的主觀的價值より發生するのであるが、一度發生する時は、之より離れて一客觀性と獨立性とを具有するに至るのである。従つて社會的客觀的價值は個人的主觀的價值と同一の法則に従ふものではない。個人的主觀的價值は、個人の主觀的價值判斷の結果として發生するも、社會

的客觀的價值は、個人の主觀的價值判斷より獨立して其意義を有し得るのである。

社會的客觀的價值は更に之を目的價值と手段價值とに分けることが出来る。目的價值は、素材の効用を基礎として成立する價值にして、手段價值は、其素材の効用を離れて他の客體を獲得し得るてふ職能に基いて成立する價值である。今或客體に社會的なる目的價值が成立して居るならば、或人は自己の有する財貨を與へて、社會的目的價值の成立せる客體を自己の欲する財貨の獲得の手段として取得する様になる。此場合に於て社會的目的價值の成立せる客體を受取る者は、それを只自己の欲する財貨獲得の手段としてのみ觀察するが故に、彼にはその素材價價の自己に對する効用如何は問題ではない。彼はその財貨獲得の手段としての効用にのみ着目するのである。茲に目的價值より獨立して手段價值が成立するのである。此の目的價值と手段價值も亦 *Korrelat* の關係の下に立つ。而して手段價值は目的價值より發生すれども、一旦手段價值にして發生すれば、そは獨立の意義を有し、目的價值とは異なる法則に従ふ。目的價值は素材の効用を前提して初めて存立するも、手段價值は素材の効用より離れて、財貨獲得の手段たる効用によつて成立する。然るに財貨獲得の手段たる効用はと、とりもなほさず、其によつて支配し得らるゝ諸財の價值によつて條件付けらるゝが故に、手段價值に於ては其効用と交換價值とは先後因果の關係ではなく相關關係の下にあるの

である。

抑々貨幣は、自己に於て消費し、又は永續的使用に供するが爲に受領せらるゝものではなく、必ず自己の欲する財貨を獲得するが爲に不定の第三者、換言すれば、社會に再び讓渡すの目的を以つて受領せらるゝのである。即ち一客體が貨幣たるや否やを決するの標準は、該客體の個人に對する意義を考慮するや、社會に對する意義に着目するや、又該客體を取引に際し目的として取扱ふや、手段として遇するやに在り。故に貨幣の價值は社會的客觀的價值であり、又手段價值である。從つて貨幣は價值を有するも、それは個人的主觀的價值判斷の對象たるが爲めにあらずと論ぜなければならず、又貨幣の効用と價值とは前後因果の關係に非ずして相關關係の下に在りと言はねばならぬ。

扨て、以上の所論の後、翻つてヘルフェリツヒに對する疑問の諸點を觀る時、彼が貨幣は主觀的價值判斷の對象なるが故に價值性を有すとの主張は、貨幣の價值は社會的價值なるを看過したるところに、又彼が貨幣に於ては一般財と同様利用性と費用性に基いて其の價值成立すと説くは、それが手段價值なるを忘れたるところに、共にその缺陷を有するものと言はねばならぬ。換言すれば、ヘルフェリツヒの誤りは、貨幣が經濟上に占むる特殊の地位を無視し、貨幣の價值と一般經濟價值との間に存する本質的差異を認識せざるに基くものと結論せねばならぬ。

- (1) R. Liefmann, Geld und Gold, 1916, S. 134.
- (2) K. Soda, Geld und Wert, Zweite Auflage. S. 54—86.

